

## 平成 25 年度第 3 回伊勢志摩定住自立圏共生ビジョン懇談会 結果概要

◆日時 平成 26 年 2 月 24 日（月）19：00～20：15

◆会場 伊勢市役所本庁舎 4 階 4-5 会議室

### ◆出席委員

齋藤 平委員、大津春久委員、木村成吾委員、大西 栄委員、奥田昌利委員、  
早川正素委員、小見山健司委員、山崎勝也委員、中村 功委員、田村重幸委員  
米倉敦也委員、東谷泰明委員

### ◆欠席委員

西山 敦委員、岩崎良文委員、西村純一委員、前田政吉委員、畑 芳晴委員

### ◆出席職員

情報戦略局長、行政経営課長、行政経営課政策係長、行政経営課政策係主事 1 名、  
健康課長、こども課長、病院事務部参事、商工労政課長、農林水産課長、  
産業支援課企業誘致係長、交通政策課主事、都市整備部次長、教育研究所係長、  
広報広聴課係長

### ◆内容

#### 1 伊勢志摩圏域の現在と将来について懇談

##### (1) 伊勢志摩圏域の現在と将来について【懇談】＜懇談概要は別紙＞

- ・圏域における現状、課題、強みなど
- ・圏域の将来像について
- ・圏域づくりの基本的な取組方針について

## ○経済・雇用について

- ・サービス業についてはデータとしても実感としても人手が足りない状況にある。サービス業以外の分野においても、雇用で困っている事業者が多いというのが実感である。例えば、事務系の職種については希望者が多い状況にはあるものの、事業者としては、リーダーとなるような人材を求めている。また、メーカー系においては、データ上としては求人数と募集数が均衡しているが、本当に働きたいという気持ちの人ばかりとは言えないのが現状である。北勢地区を中心に活況になってきており、建設土木関係については東北地方や公共工事に流れる傾向もあり、一層の人手不足が予想されている。その他の業種においても、現状よりもますます人手不足になることが予想される。
- ・自分自身は伊勢の出身ではないが、住んでみると伊勢は本当に良いところであると感じている。私の会社でも伊勢の社員は、伊勢に家を建てて、南北に長い三重県内を無理してでも通勤する社員が多いように思う。食べ物もおいしいし、気候も良い。文化も高いし、人柄も良い。そういう意味で住むには本当に良いところである。しかし、伊勢は観光に注目を浴びて、観光誘客に終始してしまっているように感じるところがある。もちろん、観光も大切。観光で経済が潤って、そのおかげで定住者も増えるというのは良い構造だと思うが、実際に観光客が多くても人手不足ということであれば、ミスマッチになってしまう。
- ・定住するのにすごく良い地域だということを、地域のネットワークで広げられれば良いと思う。印象として申し上げると、例えば、県内を見渡しても大学がある町というのは限られている。あるいは、全国大会でもいつもトップクラスに入る美容学校もあるし、専門学校など、いろいろな教育施設が伊勢にはたくさんある。医療機関についても、日赤さんがあり、市立の病院も平成30年には新装される。都市部においても医療関係が不足することが予想される状況の中で、この近隣については医療機関がすごく充実している。このようなことがアピールされていないと感じている。
- ・東京にいと、三重県内でどのような企業が求人しているのかが、なかなかわからない。県内から県外へ、東京へ出て行った若者を県内企業とマッチングさせる取組を行っているコンサルがある。地域でもまちをこのような取組ができればよいと思う。
- ・サービス業においては、土日に休みがない、勤務時間が早朝深夜になるなどのイメージがあるが、就職を避ける傾向があるが、必ずしもそうではなく誤解されている面がある。仕事のイメージと実際の内容が相違しているケースがある。
- ・学生を社会に送り出すのは大学の責任であると考えている中、地域の企業・団体・自治体に協力をしていただき、インターンシップを受け入れてもらっている。学生もそれぞれの職種にイメージを持っているが、実際に体験をすると態度に変化が現れることがある。単に就業体験だけでなく、その仕事を持つ社会的な意義、働いている人たちの自信と誇りなどを感じて帰ってくる。また、企業が学生にどのような

知識や力を求めているのかといったことについて、知りたい。

- 専門職であれば少し違うかもしれないが、総合事務職においては明瞭であり、コミュニケーション能力である。挨拶ができない、上司と会話ができない。当たり前のことが当たり前でできなくなってきた。だから、当たり前のことができるだけで、輝ける時代が来た、と感じている。当たり前のことを教えていただけると企業は助かるのではないかと思っている。
- 観光資源だけでなく、定住するために魅力的な地域資源を発信することは確かに大切であると感じた。
- 自分自身も仕事上、いろいろな場所へ移り住んでいるが、人がそこに住むきっかけというのは、観光に行ったからという人は少ないと思う。仮に住みたい要素があっても、生活の糧がなければ定住には結びつかない。多いのは、転勤してきた人が住環境や教育などの良い所に定住し、場合によっては単身赴任するというケースだと思う。他には、大学に進学し、そのまま大学のところに就職して定住するケース、リタイヤされた人が、都会よりも田舎のほうが良いといった価値観などによるケースなどである。やはり、仕事大きいと思う。人口予測を見ると非常にシビアな状況にあり、定住する魅力について発信することが必要であると感じている。
- 平成 12 年に三重県の伊勢志摩生活創造圏ビジョンの取組の一環で始めたもので、「伊勢志摩きらり千選」というウェブサイトがあって、地域資源マップというのがある。せっかく地元の人が足で集めた情報なので、このような内容をリニューアルして、地域資源を有効に活用することも良いと思う。今あるものを活用する視点も大切であると思う。
- 定住する上におけるメリットデメリットなどを分析するのも良いと思う。
- 子育てをする人にとって、観光関連の仕事をするのは難しい。観光都市ということであれば、観光に従事する人たちが共稼ぎで家庭を持って、安心して生活できる、就業できる環境を整えることもひとつのテーマであると思う。
- 求人難を克服するために、地域の魅力をアピールして、他県から定住者を呼び込んだらどうか。そして空き家に住んでもらうしくみを構築できれば良いと思う。そして定住した人が、知り合いなどを招待すれば、観光客の増加にも繋がる。
- 去年は伊勢神宮の参拝者数が 1,420 万人という過去最大であった。鳥羽の位置づけは伊勢神宮の参拝者が直会（なおらい）という位置づけで宿泊するのであるが、200 弱の宿泊施設がある。この中には大手資本でやっているところ、老舗、家族でやっている民宿などがあるが、そういった中でも社宅や住宅施設が完備されているなどすると雇用条件がしっかりしているところは、定住者が多い。
- 行政のほうで雇用促進住宅などをしっかりと整備していただければ、定住者が増えるのではないかと思う。
- 観光サービス業は、好不況による雇用情勢、賃金が低いなどの不安定的な要素があり、夫婦揃って共働きで宿泊業などに従事している人は少ない。観光業に従事する人を定住に結びつけるためには、住宅の整備や保育園の利用拡大などの子育て支援

が必要である。

- 県域内における夫婦共働きの世帯に関するデータはあるのか？  
→確認する。
- 経済産業活動においては、市や町の壁はない。買い物に行ったり、就職したりするのも行政界に関係なく行われている。
- 製造業の人たちからの話だが、今の伊勢ではパートの方を雇うのにも苦勞している状況のようである。サービス業へ人手が流れているようである。
- 地域によっては、工場を誘致する際に、ある程度優秀な従業員を地域で確保できるのかとどうかという問題が生じる。この地域は、ある程度従業員を確保できる地域であるとは思うものの、工場を誘致するよりも、例えば、市や町ごとの努力だけでなく地域が一体となって取り組む地域間競争のようなもので定住に繋げるなどの取組が重要になってくるのではないかと感じている。
- 観光についても、最近はインターネットで旅行先の情報を得て動くケースが多いと思うことから、例えば、伊勢に観光へやってくる人がインターネットで情報を得る際に、伊勢の情報を見れば、圏域の情報を見られるような、また興味を引くような仕組みが多くあれば良いと思う。もちろん、観光だけでなく色々な分野においてこのような取組ができればと思う。
- 当社においても事務職の確保については苦勞していないが、乗務員の確保に苦勞しており、サービス職と通じるところがあると感じている。特にバス事業においては、土日が休みでなく、休日が不規則であったり、拘束時間が長めになったりという観光業界全体にも通じていると思う。
- 労働力の配分ということになるであろうが、観光業の担い手も必要であるが、農林水産業の担い手不足については深刻である。
- 企業立地を推進して雇用を確保するという視点から考えると、我々も県外で採用活動を行うことも考える必要があると感じた。
- 福祉分野もサービス職であると思っている。夜勤があるとか土日が休めないとか、汚いものも扱わないといけない、或いは給料が安いなどの面で避けられていたことも以前はあったが、最近は、職場環境も相当改善されてきており、依然避けられてきた要因も少なくなってきたと感じている。しかしながら、介護事業所では正規職員だけでは採算が合わないことから、契約社員やパートに頼るところが多い。彼らにとっては、給料が少ないということだけでなく、それ以上に先が見えない不安が大きい。安心してこの地で暮らしていけないという不安がある。介護保険制度の見直しが3年に1度行われるが、年々厳しい内容となってきた。1市町では難しいとは思いますが、従事者が将来も安心して介護の場で働けるということが実感できれば、定住者も増えてくると思う。

## ○教育（社会教育・生涯教育）について

- ・図書館についてであるが、以前はフルスペックで様々な分野の本を揃えていたが、最近では、図書館ごとに特色を出す傾向にある。蔵書の検索システムが整備されたこともあり、その図書館にない本は、別の図書館から借りることが可能となっている。
- ・本を紹介するという取組が多くなっている。以前の話になるが、県立長島高校では司書が生徒たちに面白い本を紹介していた。この取組が評判となり、町の人たちも図書室を利用しにやってくる、来館者・利用者の満足度が高まり、その司書が文部科学大臣賞を受賞したという事例がある。ちなみに、その司書の方は現在、宇治山田商業に在籍している。
- ・最近流行の手法として、書評合戦というものがある。これは、自分が面白いと思う本を1分間で紹介し合い、聞いている人たちが読みたいと思った本に投票するという取組である。このように、本の面白さを人に伝えるという取組も色々も行われている。
- ・生涯学び続ける人が理想とされる社会人像とも言われており、図書館は生涯学習において、知の集積としての意義が大きいと思う。
- ・人口予測などを考えると、今現在の行政サービスがいつまでも維持できるのかという観点から考えると、図書館サービスについても、図書館のヘビーユーザーの要望に応え続けることもできなくなるであろうし、地域図書館としてのあり方について考える必要があると思う。図書館は、子どもたちへの単に本を貸し借りする機能だけでなく、地域の交流の場としても機能も有しているが、利用者数の向上だけでなく、新たな仕組みについて考えるべきである。
- ・津市は10の市町が合併したことから、旧の市町の図書館システムを合体させて、検索や相互貸し借りができるようになり、特定の図書館では借りっぱなしになっている本が、別の図書館で借りられるなど、便利になったと感じている。行政レベルを超えると難しいかもしれないが、その自治体以外の人が使えようようにして、共通のカードなどがあれば、利便性は向上すると思う。
- ・合併する前から小俣図書館が充実しているとの評判が高く、有名であった。
- ・各市町では、生涯学習として様々な講座を開いており、趣味を充実させるなどの取組をやっていると思う。最近では、講師の高齢化が進み、確保するのが難しい状況にあり、一方受講者側についても、ある程度の人数を確保することが難しい状況にある。これらのことから、度会郡内で募集を行うなどの取組を行っている。このような情報共有・交流など観点も、生涯学習を進める上で大切になってくると思う。
- ・名古屋市では名古屋市民大学という生涯学習の講座があり、希望者が入れないくらい非常に人気が高い。教養講座や陶芸などの趣味の講座などがあるが、座学の講座を聞くのではなく、1年間、クラブ活動のイメージで自分たちで勉強したりするようである。それぞれの市町では色々な取組を行っていると思うが、それらの情報を集めて、トータルとして市民大学などとするのも面白い。
- ・自分たちの町でやっている講座などは知っていても、隣の町でどのような講座をや

っているかは、確かにあまり知らないし、面白い講座があれば行きたくなる人もいると思う。

#### ○その他

- ・定住するためには、水・空気・食が一番の魅力であると思っている。40年位前になるが、東京から帰ってきた時、本当に良い町だなと感じた。しかしながら、自分も含めてであるが地域の人たちは、きれいな水や空気、安心できる食べ物などを大切に思ってきたのかどうと言え、どうなのだろうか。かつて泳げていた川などでも、現在は泳げないような状態になっている。一方、東京湾などはきれいになり、魚が食べられるほどになっている。都会は定住するために努力をしてきたけれど、この地域は本当に大事なものを大事と感じて、残す努力をしてきたのだろうか。定住を進めるためには、きれいな水、きれいな空気、安心できる食などを打ち出していく必要があると思う。
- ・定住するというのは、基本的にはその地域に住んでいる子供たちがそのまま住める環境にしてあげることが、一番大切だと思っている。大紀町は、圏域の中では伊勢から一番離れている町であり、観光だけでは厳しいと感じており、産業を成立させるためにも環境保全などに力を入れている。90%以上が山である町にもかかわらず、スギとヒノキの違いがわからない子どもたちが多。地域の子どもに対して、地域の良さや地域における昔からの生活様式などについて、体験なども交えて教える必要があると感じている。地域のお年寄りから教えてもらうなども良いと思う。まちの魅力を知っていたら、進学などでまちを出て行っても、また帰ってきて地域のために働きたいと思う若者が出てくるかもしれない。
- ・圏域で人口が増えているのは玉城町であるが、原因はよくわからない。どこの市町でも努力していると思うが、結果として玉城町では人が集まってきている。ひとつには地理的条件があると思う。高速道路のインターチェンジやサニーロードができたり、海拔が高いことから安心な土地であることや、それから早くから松下電器や京セラなどの企業ができたりと、これらの相乗効果により、今は比較的玉城町に人が来ていただいていると思っている。
- ・その町に住んだ人が、「この町に来て良かった」と思えることが定住に繋がるのだろうと思う。玉城町には城があるが、清掃は町民が行うが1回の清掃に600人くらいが集まる。自分たちで町を守っていかうという人が多いと感じている。何かの形で自分たちが役に立ちたいと思う人たちによって、今の町があるのではないかと考えている。

以上